

⑬ シニアパワーを引き出す地域貢献型老人クラブを栄区から！ 「高齢者が高齢者を助けたいくなるような仕組みづくり」に知恵を出し合う

あえて「派閥を活用せよ」

会社勤めをしていた頃は、あまり地域のことは考えていませんでした。定年退職が近づいていた平成11年に、湘南桂台自治会の会長が病気で倒れて、それまで名ばかりの副会長だった私が、急遽、後任を引き受けることになりました。地域には各界の専門家が住んでおられるので自然と謙虚になる。例えば教育問題について自分なりに考えていたら、文部科学省の審議官の方が住んでいたりで、知ったかぶりしてもすぐに化けの皮がはがれる。だけど、そういう方がいるからって、何もしないで引っこ込み思案になるのはダメで、少々間違ってもいいから自分が正しいと思うことはやればいいと思います。

持っています。人間の輪としての大きいところのリーダーはそのまま戦力になるので活用させてもらいます。自治会の役員は短いところでもありますが、一年交代は素晴らしい面もあります。ボランティア活動の実践テストを毎年、順番にやっていることになるので、その時の働き具合をみていけば、地域活動を真面目に取り組む人か、いい加減な人か、ということが分かります。

きちんと説明をして自治会加入率100%に

湘南桂台自体会は加入率ほぼ100%です。転入してきた方をウエルカムミーティングという茶話会に呼んで、お子さんも一緒にお菓子を食べながら、「この自治会はどういうルールがあって、こんなことをしています。皆さんにはここを協力していただきませう」というPRを90分程でする。その説明をきちんとすると、自治会加入に「ノー」と

例えば私は「派閥を活用せよ」と言った。その心は、自治会の中で人材を発掘するときに、ゴルフ等、地域の中で活動しているグループがあれば、そのグループのリーダーはそれだけ地域の中で力を

いう方はめったにいない。さらに、今、住んでいない方、家を建てていなくて敷地だけ持っている方にも、きちっと自治会に入ってもらう（会費は1/2）。だから連絡先も分かっている、雑草等の空き家問題とかが非常に少ない。100%加入だからみんながルールを守ってくれますが、入らない人がいたら問題が発生します。

大事なのは、加入のメリットを感じられること。まず、普段の行事をきちんとやる。1月はどんど焼き、5月はミニリンピック運動会、7月は夏祭り、10月は三世代まつり、という具合です。それから会報を毎月発行して、情報共有をしています。会報は脈拍のように定期的に発行しないと、心が伝わりません。

シニアクラブは世の中に役に立つ活動

自治会長の折、「桂山クラブ」という老人クラブの立ち上げも務めさせていただきました。当時、実質的な活動を

できる人が1000人から30人位まで減少していたので、どうにかしようとして有志を集めてイスカッションをして、呼称を老人クラブからシニアクラブに変え、加入資格を55歳に下げた間口を広げ、クラブの運営をクラブ役員が引受け、スポーツや趣味のサークル活動はその道の達人・名人に指導に専念してもらおう等、新しい仕組みを導入したところ、若い層の加入が増え、現在、会員は500人にまで増えました。

今、全国の老人クラブは後継者がいなくて潰れそうになっているところが多いが、それでも日本の中では最大の任意団体です。老人クラブはポリシーを変えなきゃいけない時代にきていると思います。昭和38年に老人福祉法ができた頃とは社会状況が変わって、今は高齢者が高齢者を助ける時代。自分たちのエネルギーの何パーセントかを社会貢献に回せば、それがうまく循環していくはずなんです。これに近い考えをもつ

竹谷 康生さん

栄区シニアクラブ連合会会長、認定NPO法人市民セクターよこはま副理事長、横浜市まちづくりコーディネーター。湘南桂台自治会会長として平成13年の地区計画導入などに携わる。栄区、戸塚区、港南区の3区に跨ってまちづくりを進める「さかえ住宅環境フォーラム」の会長としても10年以上活動中。



聞き手

勅使川原 栄子

栄区高齢・障害支援課高齢・障害係長

田中 真弓

栄区高齢・障害支援課

ているのが、アメリカのAARP（全米退職者協会）。そのためには自分たちのエネルギーをどう使おうかと考えている高齢者に、世の中はこう



栄区シニアクラブ「趣味の作品展」

いうことを望んでいますから参加してくださいという具合にベクトルを示していくことが必要です。栄区シニアクラブ連合会の取組例として、高齢者が振込詐欺などの被害に合わないよう、栄警察署等と協力して、見守りサポーターを育成して世の中のために貢献していく取組を行っています。

そもそも横浜市の地域福祉保健計画では、老人クラブは計画の担い手ではなくて社会に扶養されるような扱いになっていたので、担い手としての活用も認めてくださいとお願いをして、昨年3月に策定された第3期計画では、担い手を分担する主体として老人クラブの名前が入るように

なりました。我々も戦力として認められることが、活動の励みになります。

栄区シニアクラブ連合会役員 の80歳定年制・80歳以上の活躍の新たな「場」を創る

平成26年に栄区シニアクラブ連合の会長になって、役員80歳定年制(原則)を作り直しました。無論、会員に定年制はありませぬ。いつまでも仲間としてともに楽しみ、支え合います。しかし、みんなのお世話をする役員が80歳を超えていると、一般的には、会としての活動が低調になり、マンネリ化に陥って、クラブ活動の魅力が落ち、若い層の入会が減り、会員が減少、となるのを防ごうという考えです。次の「若い人たち」がど

んどん入ってこられるような、魅力ある活動を工夫していかなければならないと思っています。

私の次の夢は、80歳以上で元気な人の出場所、活躍の場としてネットワークを作ったり、シニアクラブのロータリークラブ、つまりプレミアム性のある新しい組織を創ることです。これを第2のボランティア団体にまで育てあげたい。まだ賛否両論ですが、こういったことを考えたり、

周りの人と知恵を出し合ったりしながら、行動に移すことが大好きなんです。

直ぐには否定しない

シニアクラブにしろ自治会にしろ、団体をまとめていくのに苦労したのは、会社組織のような指揮命令系統がはっきりしている組織でなく、みんなが平等の立場である中で話し合いやお願いをしなければならぬということ。

松下幸之助さんの本の一節にある、「知っていても直ぐには全てを答えず、また欠点に分かっていても否定せず」というエピソードは参考になります。ある販売店の社長から提案があったときに、その提案の欠点を知っていたとしても、「ほほう、そこまで考えていただいているんですか、わかりました、すぐ会社を持ち帰って早速試してみます。」と一旦置いて帰る。そしてワントンポ遅らせて、実はこれはこうでこういうことですよと後で説明する。その場で否定してしまうと、次からはもうその人は提案出してくれなくなる。ただ僕がこれを真似すると、知ってるくせにとすぐばれてしまうけど(笑)。

マネジメントとスキルを分離する

人をつなぐ技術は、会社員時代の経験が活かしているかもしれませぬ。商品開発で全国を廻って、お客様や取扱い商店の意見を聴きに行くという仕事をしていた時に、相手に迷惑がられずに意見を聞くためにはどうすればいいのかと考えました。それで、コミュニケーションというのはギブアンドテイクだと思いつき、相手が知りたいことを与えられるように勉強しました。サラリーマンとして人と人との間に立つて経験を積まれてきた方のうち、どんな方が地域におけるコーディネーター役になるかと聞かれれば、好奇心が強いというかなんでもやってみたがる人かな、という気がします。もう会社をやめたからあとは自分の楽しみだけでいいと思ってしまうような人はなかなか難しいかも知れませぬ。でも、そういう人もきっかけをうまく作れば変わってくると思います。

例えば、自治会やシニアクラブに誘う時に、「あなたのリタイアするのはもったいない。その素晴らしいパソコンの腕が錆びつく前にみんなに教えてくれませんか? シニア

クラブに入ると色んなわずらわしいこともあると思われらるなら、マネジメントは僕らがやるので、あなたはスキルだけ提供してくればいいです。現役時代に培ったスキルをぜひ地域社会に還元してください」と口説くんです。そうやって1年も経てば、もう溶け込んでいるから、喜んでマネジメントもやってくれます。今もっている自分の技術を教えることが嫌いな人はあんまりいないですね。そういう部分を引き出せばと思っています。

【インタビューを終えて】

ここでいう「コミュニティデザイナー」というのは、まさに竹谷様のように人と人を繋ぎながら地域での暮らしやすさを高めているような方で、これまでの御苦労や経験を培ってこられた部分も聞かせいただき、沢山勉強させていただきます。(勅使川原)

色々なジャンルの本を読むのが好きで、常に向上心溢れる勉強家な方で、冷静な判断の中にも熱いハートを持つ情熱的な一面を持っていらっしゃる竹谷さんの笑顔が、今日もさらさらして素敵でした。(田中)